

みんなの童話

縁日のふうりん



飾ってあるばあちゃんの写真をし
ばらく見つめた。

「ばあさんは、ふうりんのリーン
となる音が好きだった」

軒につるされたふうりんを見て
じいちゃん目が、うるんでいた。

よしおが縁側にもどると、庭に
まいた水にさそわれて、すず風が
吹いてきた。風は、ふうりんをゆ
らしてリーン・リーンとすんだ音
を鳴らした。

「もうすぐばあさんにあえるぞ」

「えっ、あえるって」

「ああ、いますずしい風がふいた
じやる。『もうすぐ秋がきます
よ』ってな」

じいちゃんは、ばあちゃんみた
いな声と言いだ言った。

「へえー、ばあちゃんが風で話を
するの」

「ふうりんの音を聞くと。よし
おにも言ったぞ。『彼岸にはあいに
行きます』と。聞こえんかったか」

じいちゃんには、ばあちゃんの
声が聞こえるらしい。

よしおは、じいちゃんが好き
だった。いろいろなことを教えて

くれる。きょうも話したいことが
あった。でも、なかなか言い出せ
なかった。だから、じいちゃんや
ばあちゃんのことを聞いた。

「あのさ、じいちゃん」

よしおが、もじもじしながら言
い出した。

「友だちはいた」

「なにをして遊んだ」

「けんだまつてなあに」

「コマまわせる」

「野球はしたの」

よしおは、矢つぎばやに聞いた。

「はっはっはっ、よしおはなんで
も聞いてくるな」

じいちゃんが、声だかに笑った。

「けんかはしたの」

「仲直りってどうしたらいい」

よしおの質問が続く。

「どうした。友だちとけんかした
んか」

よしおは、ちよつと言葉をつま
らせて下を向いた。

「だって・・・」

ますます小さい声になった。

「そうか、そうだったか」

じいちゃんは、よしおの頭をな
げた。そしてゆっくり話した。

「よしおのいいところはな
うん」

「なんでも自分のことばで言うこと
じゃ」

「じぶんのことば」

「ああ、自分でよくかんがえて言
うじやる。ばあさんもそうだった」

「だってぼくが言うんだもの」

「そこがいいんじや、そこんとこ
がな。ばあさんに似るとる」

よしおはわかったようなわから
んような気持ちでいた。

「はっはっ。もう一度自分のこと
ばで、その子に話してごらん」

じいちゃんは、もう一度よしお
の頭をこしこしなせた。

リーン・リーン

夕がた吹くすず風が、ふうりん
のすんだ音をひびかせた。そこに
鳴き虫の音が重なりあった。

リリー・リーン

「ほほっ、すず虫が鳴き出したわ
い。きれいな音を出すなあ」

と、庭に下りたおじいちゃんがよ
しおを呼んだ。

「ぼくには、すず虫の声は、ふう
りんの音にも似ているって思う」

よしおは、夕焼け空をあおぎ見
て言った。軒では夏まつりの縁日
で買ったふうりんが、しずかにゆ
れた。

しろやま会員 かど まさこ